

ヘルシンキにおける世界体操祭 (Gymnaestrada) 2015に関する研究報告

A report on Gymnaestrada 2015 in Helsinki

坂口 正治 松尾 順一
SAKAGUCHI Masaharu, MATSUO Junichi

1. 体操 (Gymnastik) の史的概観

体操を大別すると、器械を利用して行う体操と、器械を利用しないで徒手や手具を用いて行う体操の2種類に分けることができる。前者は、ヤーンが創始した体操 (Turnen) で、現在の体操競技の系譜に属するものである。後者は、器械から離れ、日常的な運動能力により多くの人々が簡単に実施できる体操 (Gymnastik) である。世界体操祭 “Gymnaestrada” の中で披露された各種の体操演技は、名称からもわかるように、後者の系譜に属するものである。“Gymnastik” という用語は、近代体育の父であるグーツムーツが初めて使用したといわれ、古代ギリシャ語の裸体で身体を訓練することを意味した “ギュムナスティケー” (gymnastike) を語源としている。しかし、グーツムーツが使用したGymnastikという概念は、今日の教育概念としての “体育” と同じような広がりや意味をもつ言葉であった。それゆえ、今日の「体操」自体の原点をこのグーツムーツのGymnastikに求めることはできない。今日に繋がる教育学的な「体操」自体の原点は、近代の教育学者であるペスタロッチが提唱した “基本体操” (Elementargymnastik) に見出すのが一般的である。ヤーンも、木馬での器械運動を行う前の準備的な運動 (Vorübungen) として徒手での5つの運動を採用している。しかしこのような徒手での諸運動に大きな教育的価値を置き体操授業の中心教材として導入したのが、ドイツ学校体育の父であるシュピーズである。このシュピーズが、ドイツ語の徒手運動を意味する “Freiübungen” という用語を始めて使用し、彼は、「もっとも自由な活動を起こさせ、そしてもっとも通常の状態から器械から離れ、体操家の身体を自由にする運動であるので、Frei (自由) üben (運動) という言葉を選んだ」と述べている。また、グーツムーツの近代体育の強い影響をうけスウェーデン体操を創始したリングも、軍隊での体育を推進するにあたり、この徒手運動に大きな価値を置いた。ペスタロッチ、シュピーズ、そしてリングの徒手運動に共通して言えることは、解剖学的な知見に基づいて、身体各部位の関節を中心に運動の可能性を追求しそしてそれを組み合わせた体操法であるという点である。また、“気付けの姿勢” などに見られるように、それぞれの運動が定型化、鋳型化され、人間の本质に根ざした自然な動きとは大きくかけ離れた硬直した動きがその体操の中核をなしている。後世の人々は、これらの鋳型化・定型化した体操を、“操り人形体操” と称し、批判した。これらの体操は、実施に当たり器械体操などと異なり特別な技術や能力を必要としないために、一般の人々も容易に実施できるという特徴がある。そのため多くの人々が一斉に体操を行うことができる。シュピーズは、学校でのクラス単位での体操の授業で、兵役前の準備教育として、徒手体操と隊列運動を組み合わせた指揮者の号令で一斉に動く規律訓練を行った。さらには学校の授業以外でも、

ドイツ帝国期のドイツ体操祭においては、多い場合には7,000名の体操家が集団徒手体操に参加し、指揮者の号令で一斉に規律正しく動く「無人称の身体」が表現された。この当時の徒手体操の基本的な足の構えは、剣術の際に体の少し前に足を置く姿勢である“Anlage”と、剣を持ちしっかりと踏み込む姿勢である“Ausfall”であり、徒手体操の中にこのような剣術の基本姿勢が盛り込まれていた。また、棍棒をもつての集団徒手体操も頻繁に実施され、このような集団徒手体操の中にも剣や銃の操作法の訓練が組み込まれていたといえる。このような集団徒手体操は、戦争を強く意識した集団による体操システムであり、その担い手も当然“男性”であった。

第一次世界大戦後のヴァイマル共和国の時代になると、体操の担い手が「男性」から「女性」へと大きく移行する。その契機となったのが、20世紀の初頭から始まった体操促進運動（Gymnastikbewegung）であった。この運動は、19世紀末から20世紀初頭にかけてのドイツ体操祭における集団徒手＝隊列運動が示しているような、鋳型化・定型化した体操システムの超克であり、さらには、人間の本性に根ざした新しい体操とその理論の構築であった。たとえば、ダルクローズは、音楽や拍子やリズムの流れを身体運動で表現する＜リズム体操＞を提唱し、ラバンは、ダンスの基本や応用形式を体操の中に取り入れ、ボーデは、音楽とともに人間の内発的な感情を自然に身体運動に表出する＜表現体操＞を創出した。

祖国防衛のために健康な国民を作り出すための、また指揮者の命令に従順にしたがう臣民を養成するための体操から、音楽やリズムにあわせ＜心の内なる感情＞を身体で表現し、そして運動それ自体の喜びを享受する体操への展開がみられた。体操は、音楽やダンスや舞踊やそして手具（女性用）と結びつき、そしてこのような新しい体操の担い手は、もちろん“女性”であった。

第二次世界大戦後の女性のスポーツ進出には目を見張るものがあるといえる。たとえば、ドイツ体操家連盟（Deutscher Turnerbund）の会員数に占める女性の割合は、1950年43%、1970年52%、1980年65%、現在は70%弱と急増しており、今日のドイツのスポーツクラブは女性優位のクラブであるといっても過言ではない。今日の体操を支えているのも女性であり、また体操も、流行のエアロビクスやピップホップや表現ダンスやロープスキッピングなどと結びつき、新しい要素を取り入れながら発展している。

2. “世界体操際2015”（Gymnaestrada 2015）にみる体操の「今」

今日の体操の目的は、大きく二つに分けられる。まずは、身体諸器官の発育発達を促すための＜身体形成＞のための体操と、次は、動くこと自体が目的で動き作りに重点をおいた＜運動形成＞のための体操である。前者には、フィットネス体操、エアロビクス体操、ストレッチ体操、トリム体操、ラジオ体操、健康体操、美容体操、疲労回復体操などが属し、後者には表現体操、創作体操、ジャズ体操、ディスコ体操、手具体操などがあるといわれている。

上記のような広がりをもつ今日の体操の中から、第15回世界体操際では多様な特色ある各国の体操演技が披露された。今年で15回目を数える世界体操祭は、4年に1度開催される世界最大の体操の祭典で、今年はヘルシンキに53カ国から2万人を越える体操愛好家が集まり、2015年7月12日から18日まで開催された。この体操祭は、オリンピックのように記録や技を競うものではなく、特色ある演技

を披露するイベントである。

まず、7月12日の夕刻、ヘルシンキのオリンピックスタジアムで開会式が行われ、53カ国2万人を超える世界の体操愛好家がそれぞれの特色あるユニホームを着て入場行進を行った。そのあと、開会式のイベントとして、スタジアムのフィールド上で、集団での親子による体操や表現体操や健康体操などのデモンストレーションが行われた。このようなフィールドでの集団での演技の中には、多くの人々が協力してあるテーマを表現するすばらしさとともに、19世紀の集団徒手＝隊列運動のような集団がまとまって一斉に動くというある意味での「恐ろしさ」も感じ取れた。時代による体操の表現形態の違いを実感した。



（開会式でのデモンストレーション演技）

13日から17日にかけて、ヘルシンキ市内のコンベンションセンターなどの屋内会場とドーム前の屋外特設ステージなどで世界各国の体操愛好家の演技が披露された。

各種の特色ある演技を調査した結果、体操の「今」として、以下の諸点をあげることができよう。

1) 幼稚園児から高齢者に至るまで、老若男女を問わず体操を行っている。



（大聖堂前の特設会場での高齢者による棒体操）



（デュッセルドルフのライン幼稚園の園児たちの組体操）

2) 体操は他の運動文化との親和性があり、ダンス、バレエ、民族舞踊、新体操、組体操、モダンアートなどと、さらに多様な音楽と結びついている。



(チベットの皆さんの民族衣装を着ての体操)

3) リング、リボン、布、扇子、大小のボールなどの手具を利用している。



(日本の女性の皆さんのリボンを使って体操)

4) 障がい者と健常者がともに演技を行い、ユニバーサルなスポーツへと展開している。



(障害のある方と健常者によるユニバーサル体操)

5）伝統的な体操の運動様式も残存している。



（日体大体操部による集団での体操演技）

体操は、ほとんど特定の運動能力を必要としないため多世代の人々が実施できるという特性を持っている。体操は、歴史的に見て、近代の国民国家においては、兵役前の規律訓練として、祖国のための健康な国民を育成するために、青少年の人間教育のために実施され、また今日に至っては、内発的な感情を体で表現する運動形成のために、現代病を克服するための処方箋として、高齢者の健康寿命を延伸するために、体育の授業やトレーニングや試合の前の準備運動として、現代人が抱える身体的・精神的なストレスを解消するために、そして自らの「生活の質」の向上を求めて体操は行われている。さらに体操は、他の運動文化との親和性があるため、ダンス、バレエ、新体操、床運動、民族舞踊、組体操、エアロビクス、ディスコダンスなどとさらにはジャズやヒップホップなどの音楽とも結びつき、その外延がますます拡大している。このような体操の外延が拡大し体操を行う目的が多様化する中で、今こそ、体操とは何であるのか、体操の本質とは何であるのかを問い直す必要があるのではないであろうか。

3. 世界体操祭とスポーツツーリズム

この報告書は平成27年7月11日から開催された第15回世界体操祭の視察の空いた時間を利用して観光した施設を概観する。また、世界体操祭に参加していた各国の選手団も私と同様に体操祭を楽しむと同時に、ヘルシンキの観光も楽しんでいる様子を記しておきたい。

ヘルシンキ市は、ヘルシンキ中央駅を中心に、南部、西部、北部と3つのエリアに分かれている。

この報告書は「第15回世界体操祭と観光レクリエーションの視点」で報告する。

まず、エスプラナーディ公園周辺には、ヘルシンキの代名詞とも言われているヘルシンキ大聖堂がある。ヘルシン



（ヘルシンキ中央駅）

キ大聖堂は、カール・エンゲル設計によるもので、ドームを軸としたシンメトリカルなデザインが特徴である。ヘルシンキ大聖堂は、ルーテル派の本山となる教会で、1852年に1230年の歳月をかけて完成した。また、大聖堂から見下ろすと石畳の元老院広場が広がっている。

世界体操祭もこの元老院広場を利用して、大階段に腰を下ろして特設ステージで演技をなすパフォーマーに声援を送る姿が印象的であった。ここではまさに、体操祭と観光が一体化しているように感じられた。次に目についたのが、ウスペンスキー寺院である。高台にあるので目立つ建物である。赤レンガ造りで北欧最大のロシア正教の教会で、1868年にロシア人建築家によって建てられた。この寺院の特徴は壁にテンペラ画でキリストと12使徒が描かれている。

また、なんといってもヘルシンキの名物であるマーケット広場は、体操祭に参加している各国からの選手団でにぎわっていた。マーケット広場はヘルシンキ郊外より果物や野菜を収穫し販売する露店で、カラフルなテントが立ち並んでいる。体操祭に参加している人々の他、多くの観光客がサクランボやイチゴ、えんどう豆やニンジンなどをそのまま食べながら歩いていた。また、冬の長いフィンランドの人々は、工芸品やマフラー、セーターなど、おみやげにぴったりの品々を販売していた。ここでは、焼き魚を売る店もあったりして、食事をとることもできる。

さらに、マーケット広場から港に沿って少し歩いたところにオールドマーケットホルの細長い建物がある。ここでも体操祭の選手団をはじめ、多くの観光客が魚類を中心とした食事を楽しむ姿が印象的であった。

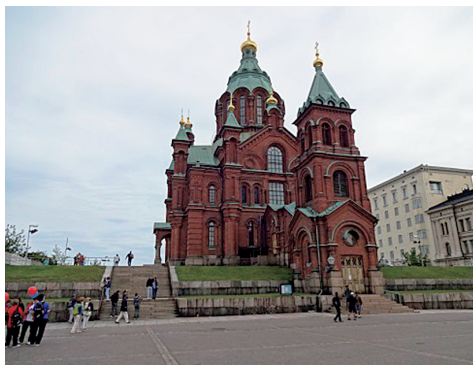
次に中心部、南部に位置するテンペリアウキオ教会がある。岩をくり抜いて作られた教会であり、別名チャーチロックと呼ばれている。建物が岩の中にすっぽり隠れているので、うっかりすると見落としてしまう。次に中心部、北部には体操祭の開会式と閉会式が行われた、オリンピック競技場とシベリウス公園がある。オリンピック競技場は1952年に開催されたヘルシンキオリンピックのために建てられた競技場である。競技場の横にそびえ立つ高さ72mの展望塔、スタディウム・タワーとフィンランドスポーツ博



(エスプラナーディ公園)



(ヘルシンキ大聖堂と元老院広場)



(ウスペンスキー寺院)



(オールドマーケット広場)

物館には体操祭参加者が列を作っていた。

オリンピック競技場から歩いて20分ほどのところにシベリウス公園がある。シベリウス公園はフィンランドの代表的作曲家、ヤン・シベリウス（1865～1959年）を記念した公園である。園内のほぼ中央にはシベリウスの肖像のオブジェがある。西側には海岸通りがあり競技場から近いこともあり、体操祭参加者が散策している姿が多く見られた。

また、特筆すべきはヘルシンキ中央駅より地下鉄で20分ほどの場所にあるラスティラ・キャンピング・ヘルシンキである。ここは年中無休でサービスを提供しているキャンプ場で、キャンプはもとより、宿泊施設や会議、食事などができる施設でもある。

今回の体操祭の参加者のなかには、ここを宿泊施設として利用していた国もあった。この施設はホテルのグレードで表示される5つ星の施設である。ここでラスティラ・キャンピング・ヘルシンキの施設の概要を記しておきたい。

まずキャンプ場に入るとすぐにオートキャンプサイトがある。ここはサイトを植込みで区切ってあって、サイトには電源が引かれている。次に共同で使用するシャワー、トイレがあり、きれいに清掃された清潔感のある施設であった。つづいて宿泊施設のキャビンを見ると、キャンピングキャビンは少人数で利用するキャビンから多人数で使用するキャビンがある。少人数のキャビンは4人。2段ベッドが2つ入っているタイプ。同様に家族で利用できるキャビンもある。多人数で利用するコテージは4名から6名が利用できるものと、ホリデーコテージとして4名から6名、6名から8名が利用できるものもある。このコテージではキッチン等が整っていて自炊ができるようになっている。

テントサイトはフリーサイトで自由に好きな場所を利用できる。また、フリーサイトを利用するキャンパーにとって嬉しいのがバーベキューを楽しめる屋外バーベキュー施設があること。ここは、キャンプ場を利用している人であれば、誰でもが利用することが出来る。さらに北欧の特徴であるサウナも備わっていて、ビーチサウナとファミリーサウナの二つの施設がある。ビーチサウナは文字通りサウナで体を温めビーチに出ていけるように簀子が敷かれている。ファミリーサウナは宿泊している家族が入れるようになっている施設である。



（オリンピック競技場）



（ラスティラキャンプ場入り口）



（オートキャンプサイト）



（フリーテントサイト）

このように、今回の世界体操祭を視察して、体操祭はもとより、世界から集まった多くの参加者が、演技に取り組むと同時に、観光の視点で、この体操祭を楽しんでいるように感じた。また、ヘルシンキの市民は、世界体操祭参加者に対して、とても暖かく受け入れている姿は、まさにホスピタリティーそのものである。



(バーベキューエリア)



(サウナルーム)